

プルーストとコレット  
—ジェンダーをめぐる—

吉川 佳英子

序

第二帝政時代に流行ったものの一つにオペレッタがあるが、社会を風刺しながら、それを明るい音楽にのせて演じる洒脱な舞台である。青年プルーストはオペレッタにも喜劇にも足繁く通ったものだ。そしてコレットは当時、盛況だったバタ克蘭劇場で1912年『恋する猫』でオペレッタ出演している。プルーストがコレットの舞台を見たとの記録は見当たらないけれども、二人は大衆芸術という点で共有しているものがある。

この論文においては、庶民の生活を大いに切り取って見せてくれる猫という小さな、しかし二人の作家にとっては決して小さくはない切り口から、彼らがそれぞれのやり方で感じ取ろうとしたものが果たしてどの様なものなのか、それがどんな可能性を秘めているのかを探っていくつもりである。

ところで、ドイツの批評家クルツィウスは「人間は樹や花と同様に、或る一定の土地の産物である。社会描写の大作家は、その人が社会をば動物系 <sup>ファウナ</sup> Fauna として・動物界 <sup>メンアジェリー</sup> Menagerie として見るか、それとも植物系 <sup>フローラ</sup> Flora として・植物界 <sup>ヴェゲタチオン</sup> Vegetation として見るかによって、分類され得ると思う。<sup>①</sup>」と書いている。二種類の分類というのは、いささか大まかな感じがしないでもないが、感性の傾向として大きくその違いをとらえたものと受け止め、例えばコレットやプルーストもそういう見方にある意味でくみすることができると思われる。

I. <sup>ファウナ</sup>動物系コレットと<sup>フローラ</sup>植物系プルースト

コレットの作品のなかで、猫や犬や馬たちが、ある特別な役割を与えられていることは既によく知られている。まず、『動物の対話』においては、一組の夫婦に飼われたオス猫キキとオス犬トビーの日常が描かれ、トビーは不実な夫と別れた飼い主の女性について語る。また、同じく動物が主役レベルで登場する『動物たちの平和』では、犬や猫をはじめ、青大将、魚、梟、松露を探す牝豚、色彩鮮やかな蝶、熊、小鳥、虎、ライオン、豹、土蜘蛛、栗鼠、貂、兎、かわうそ、雉子といった動物が登場し、それぞれの短編の中で動物の自然な姿が映し出される。さらに、『牝猫』においては猫をとおして人間の嫉妬の極致が描き出される。これらの人格を持った存在として登場する猫たちは、むろん一種の擬人化なのであるが、それ以前に、猫の生態の克明な描写が印象的である。それは作者の正確なそして細やかな観察眼によるものだが、それではもう一方の「プルーストにおける植物」にも同じような傾向が見出せるのだろうか。

先に引用したクウルツィウスによると、「土地とその産物、—これはプルーストの本能が強調してやまぬ自然の<sup>アスペクト</sup>相である。彼の〈生の感情〉の最も奥深い基礎の一つなる現実層である。②」とある。確かにプルーストが無意志的記憶の暗示に気づくの馬車から見えるユディニメルの3本の木であるし、彼が自然から受ける啓示は大きい。また、彼の心を揺さぶる女性の登場箇所には常に何らかの植物、そして花がつきまとう。

Tout à coup, je m'arrêtai, je ne pus plus bouger, comme il arrive quand *une vision* ne s'adresse pas seulement à *nos regards*, mais requiert des perceptions plus profondes et dispose de notre être tout entier. Une fillette d'un blond roux qui avait l'air de rentrer de promenade et tenait à la main une bêche de jardinage, nous regardait, levant son visage semé de taches roses<sup>(3)</sup>.

(強調は全て筆者による)

ここでは「見ること」が強調され、記述されているが、プルーストは日常の風景をあたかも拡大鏡を通すごとく細部にまで光を当てながら現実を捉え直そう

とする。その現実のいわゆる受容のプロセスにおいて、ここでもブロンドの女の子であるジルベルトの若いほおの生命感がエロチックに植物のイメージをとおして描写されているのである。ただし、花の暗示はなにも女性に対してのみとは限らないのであって、有名な「ソドムとゴモラ」の冒頭部では男たちの愛のやりとりを、植物の受粉の様子を用いて表現している。

[...] et qui leur présentera un frêle jeune homme qui attendait les avances d'un robuste et bedonnant quinquagénaire, restant aussi indifférent aux avances des autres jeunes gens que restent stériles les fleurs hermaphrodites à court style de la *Primula veris* tant qu'elles ne sont fécondées que par d'autres *Primula veris* à court style aussi, tandis qu'elles accueillent avec joie le pollen des *Primula veris* à long style<sup>(4)</sup>.

この様に、ブルーストは相手が男性であれ女性であれ、つぶさに対象を眺めることで、そこに植物のイメージを見出し、さらに独特のエロスを感じ取るという傾向があるようだ。ただし、女性のなかには魅惑的なエロスとともに花という聖なるもの、ピュアなものも同時に見ているから、愛する女性のなかには誘惑と清らかなるものの同居という重層的なイメージが喚起されると言えるだろう。

コレットとブルーストは、それぞれ動物あるいは植物を対象にしながら、独自の「見る」という行為をとおして現実を拡大しつつ、独創的な受容を可能にしているようだ。

## II. 猫に関心を寄せるブルースト

ところで、ブルーストは早くからコレットの才能を評価し、特に、彼女の『ながい時間』（1917）の中のヴェネチアとローマについて書かれた下りがお気に入りだった。

1919年3月には、彼はコレットの『ミツウ』を読んでいるし、また、『シェリ』（1920）をたいそう気に入り、コレットを喜ばせもした。ブルーストとコレットはヴェルデュラン夫人のモデルの一人であるカイヤヴェ夫人のサロンで1894年

頃、実際に出会っている<sup>6)</sup>。

しかしながら、現実社会での二人の交流はなかなか深まらず、むしろすれ違ふことが多かった。まして「猫」をめぐる二人の接点というのはあるはずもない。

もとより、喘息の持病があるプルーストが、犬や猫に関心を抱くということは全くなかったし、小説中にもその言及は見られない。そんなプルーストに突然、変化が生じる。そこには、何人かの作家仲間との関わりが絡んでいるのだが、ただしそれは彼の生涯のかなり後の出来事である。

まず、ジャン・ギュスターヴ・トロンシュ（1884-1974）だが、彼はガリマールの出版部門の総務部長で、ガストン・ガリマルやジャック・リヴィエールとともに、プルーストがゴンクール賞受賞の際に共に祝福にかけつけた。それがきっかけで交流が始まる。

また、ジャン・シュランベルジェはアンドレ・ジッドらとともに、「NRF」誌を率いる小説家兼評論家だけれども、そのシュランベルジェは先のトロンシュに宛てて、7月に長女ジャニーヌが誕生したことを祝して手紙を送っている<sup>6)</sup>。

手紙の中でトロンシュが飼っている猫に言及するが、トロンシュの動物好きは有名で、犬、猫はもとより、モルモット、ガチョウにも至るようだ。

さらに、ポール・レオトーだが、筆名をブワサールという。この人は猫好きで、それもリュクサンブール公園などで何匹も拾ってきて育てるようだ。NRF 誌で長らく演劇時評を担当していたのだが、1922年の8月1日号のなかでのみ、演劇時評ではなく拾ってきた猫についてのエッセイをしたためている。それを読んだプルーストは、さっそく先のトロンシュにあてて手紙を書く。

女中のセレストは、私が寝てばかりいるので決して掃除をしない寝室で、よくおしっこをする動物を飼おうと考えたものだとぞっとすると言いました。なるほどセレストの言うとおりで、ばかなことを考えたものです。[...] 生きている猫は諦めて、まだ読んでいないコレットの『動物の対話』を手に入れるつもりです<sup>7)</sup>。

この手紙は最近まで未発表のものだったので、21 巻ある書簡集の中にも入っていない。これに対してトロンシュはブルーストにあててすぐ返事する。

Nous ne nous disputerons point à propos de Léautaud ! j'aime trop les bêtes — et depuis mon enfance la plus ancienne — pour ne pas aimer qui les défend et qui les aime (l'article en question n'était pas d'ailleurs à mon avis, même de ce point de vue, du meilleur Léautaud ). Mais quand je cherche ses puces à mon Riri je ne prétends point faire de critique dramatique ! (j'en serais d'ailleurs incapable). Si jamais vous passez outre à l'avis de Céleste (que je partage) dites le moi, je vous donnerai un petit siamois car j'ai «procuré» une femelle au Riri...[...]<sup>(8)</sup>.

さて、それではそのレオトーの拾ってきた猫をめぐるエッセイとは果たして、どの様なものなのか。ブルーストはそれを読んでどういう点でコレットの『動物の対話』をイメージしたのだろうか。

### III. レオトーのエッセイと、コレットの『動物の対話』

ポール・レオトーのエッセイと『動物の対話』を並べて、まず、類似点を4点程、挙げてみよう。

#### (1) 動物の個性

まず、レオトーのエッセイの中では、動物はまるで人間のようにそれぞれ個性を持っていて、それぞれ独立しているということが指摘される。

[...] Les animaux sont comme nous. Ils ont chacun leur individualité. Celui-ci n'est pas celui-là, qui, à son tour, n'est pas cet autre. Je le vois bien dans ma petite troupe de chats. Il y a les vagabonds et les sédentaires, les indifférents et les démonstratifs, les hardis et les timides, ceux qui vont par groupe et ceux qui préfèrent être seuls — même pour manger [...] <sup>(9)</sup>.

一方、コレットの『動物の対話』においても、これとほぼ同じ内容の言及が見られ、動物にはおとなしい性格のものや激しい性格のものなどがいて、実に多様であることをトビーは説いている。

TOBY-CHIEN : [...] Chez les voisins, je connais encore une danoise placide, vertigineuse comme une alpe ; une bergère qui n'a jamais le temps à cause de son métier ; une chienne d'arrêt nerveuse qui mord tout à coup, mais dont les yeux sauvages promettent l'ardeur ... [...]<sup>(10)</sup>.

両者ともに、動物がいかに個性的で、それぞれがいかに別々の顔を持っているかを述べるのであるが、その一方で、動物は等しくやすらぎを希求する存在であることにも触れている。

## (2) 動物のやすらぎ

レオトーのエッセイの中では、階段好きの猫たちが喜んで駆け回り、果てはそこでうたた寝してしまう様子が描かれる。

[...] Les chats aiment beaucoup un escalier. Ils y font de bonnes parties, dégringolades ou montées rapides, ou jeux d'attrape au long des barreaux de la rampe, ou si le soleil donne ils somnoient sur les marches [...]<sup>(11)</sup>.

また、『動物の対話』の中のキキは、スウィート・ホームにくつろぐ日常を謳歌し、肘掛椅子にやすらぐ楽しみを存分に味わって暮らしている。

KIKI-LA-DOUCETTE, *mentant* : [...] Home ! sweet home ! Tapis colorés à souhait pour le plaisir de mes yeux ! Potiche vaste d'où jaillit un petit palmier dont je mange les pousses, fauteuils profonds sous lesquels je cache ma balle de laine pour me faire une surprise... [...]<sup>(12)</sup>.

動物ののどかな生活ぶりを見るのは、それを飼っている人間の楽しみに他ならず、エッセイにせよ小説にせよ作品の魅力の一部ともなっているようだ。

ところで、もとより『動物の対話』は犬と猫の同居の様子を動物の視点から描いた物語なのであるけれども、犬と猫の同居という設定も、これも作品の一つの個性だろう。

### (3) 犬と猫の同居

レオトーのエッセイには、仲睦まじく暮らす犬のナナと猫のピトゥが魅力的に描かれる。

[...] Je viens de parler de cet énorme chien, nommé Nana, qui vit dans une pièce au premier. Le chat Pitou, que j'ai nommé plus haut, adore les chiens. Il arrive quelquefois que, par mégarde, et sans s'en apercevoir, on le laisse entrer et l'enferme avec Nana. Quand on vient le chercher, on le trouve trempé comme s'il sortait d'un baquet, et enchanté. C'est Nana, qui, le tenant entre ses pattes, l'a débarbouillé de toutes les façons [...] <sup>(13)</sup>.

同様に、コレットの『動物の対話』にも同居の犬と猫が対話を繰り広げるわけだが、彼らと、彼らの飼い主たちは以下のとおりに設定されている。

KIKI-LA-DOUCETTE, angora tigré.

TOBY-CHIEN, bull bringé.

LUI, seigneur de moindre importance.

ELLE, seigneur de moindre importance <sup>(14)</sup>.

### (4) 庇護される動物

さて、これらの動物たちは、いずれにしても社会で人間たちと無関係で生きてはいけなから、寄る辺なき弱い存在として人間に守ってもらう必要がある。そういう意味では我々人間に依存しているとも言えるが、レオトーのエッセイの中

では、人間がそれ故、無責任に動物たちを弄ぶべきではない旨に言及している。

[...] Je parle d'elles uniquement dans leurs rapports avec nous, disant que des êtres faibles, muets, dans notre entière dépendance, que nous mêlons volontairement à notre vie sociale, ont droit à des égards, à la protection, et ne sont pas du tout des jouets qu'on prend un jour et qu'on met à la rue un autre jour [...]<sup>(15)</sup>.

『動物の対話』においては、犬のトビーにとって飼い主の彼女が「安全な隠れ場所」なので、危険を感じると彼女の胸に飛びこむ旨が書かれている。

TOBY-CHIEN : Tout le bien et tout le mal me viennent d'Elle... Elle est le tourment aigu et le sûr refuge. Lorsau, épouvanté, je me jette en Elle, le cœur fou, que ses bras sont doux, et frais ses cheveux sur mon front [...]<sup>(16)</sup>.

この「庇護されるべき動物」という観点は、とりもなおさず、コレットの別の短編集『動物の平和』全体を貫く観点と共通するものである。引用してみよう。

Au front des armées, les bêtes sauvages partagent le sort de l'homme : les terriers tremblent, croulent et sautent, la branche foudroyée tombe avec l'oiseau qu'elle portait. Mais dans nos bois préservés, le gibier qu'on oublie se rassure et peut croire que la terre est redevenue à l'innocence, et les bêtes goûtent enfin l'illusion de la paix<sup>(17)</sup>.

戦争というものが存在しない動物の世界にあこがれ続けたコレットの「平和観」が読み取れる一節である。コレットが動物についての一連の作品を企図し、そこに託した思いが伺える重要な観点であろう。

以上、ポール・レオトーが演劇時評を一時中断して NRF 誌に掲載した猫をめぐるエッセイの内容が、プルーストに対して、コレットの『動物の対話』を想起

させるに至ったであろう両者の重なり合う点を指摘した。レオトーとコレットの動物に向ける視線こそが、おそらくそれまで動物には無関心に近かったブルーストが、彼らに共感を示し、実際に猫を飼おうなどと考えるようになったきっかけである。

#### IV. 「観察」の可能性

さて、ここまでレオトーのエッセイとコレットの『動物の対話』を比べることで、4つの点からの類似点を挙げてみたが、両者はそのコンセプトが似ているのみならず、ともに「見る」ということへのこだわりを共有しているように思われる。レオトーのエッセイの別の部分には以下に引用したように、目をこらして猫の顔をよく見る者のみが、その本当の姿を見分けられると指摘されているのである。

[...] Trois chats, — puisque je parle de chats, — noirs, tigrés, blancs ou jaunes, ne sont pas du tout, quand on *regarde* bien leur physionomie, trois chats noirs, tigrés, blancs ou jaunes, mais bien un chat, un autre chat, et encore un autre chat noir, tigré, blanc ou jaune. Des gens riront de ce que j'écris là, peut-être ? Ce sont des gens qui passent sans rien voir à rien [...] <sup>(18)</sup>.

さらに次の『動物の平和』をめぐるクリステヴァの評論の中では、コレットの凝視の人間離れした鋭さが強調されている。

A la fois perçant et tourné vers l'intérieur, *le regard* demeure cependant, chez Colette, l'ancrage le plus solide dans la chair du monde. [...]

Cet art de *la contemplation*, qu'elle a hérité de sa mère, se développe chez Colette en acuité infernale, inhumaine ; l'écrivain s'approprie la vue sorcière de la chatte pour l'observer : « Ardoisée le matin, elle devient pervenche à midi, et s'irise de mauve, de gris perle, d'argent et d'acier, comme un pigeon au soleil...Le soir, elle se fait

ombre, fumée, nuage ; elle flotte impalpable et se jette, comme une écharpe transparente, au dossier d'un fauteuil. Elle glisse le long du mur comme le reflet d'un poisson nacré...»<sup>(19)</sup>.

クリステヴァによれば『動物の平和』の一節をとおして、凝視することで慣れ親しんだはずの現実が変容されることが述べられている。そしてその結果、次の二行のように、独自の欲望の発見へとつながる旨が指摘される。

Désirer, c'est *regarder*. *Le regard* est l'organe du désir chez Colette : [...] En revanche, l'érotisme dissimulé l'assomme : [...] <sup>(20)</sup>.

ところで、同じように観察の妙、それも人間観察の意義を知り、それを実践することで論理では到達できない芸術作品の創造を可能にしたのは、他でもないプルーストである。類似した引用を二つ見てみよう。

Les êtres les plus bêtes, par leurs gestes, leurs propos, leurs sentiments involontairement exprimés, manifestent des lois qu'ils ne perçoivent pas, mais que l'artiste surprend en eux. A cause de *ce genre d'observations* le vulgaire croit l'écrivain méchant, et il le croit à tort, car dans un ridicule l'artiste voit une belle généralité, il ne l'impute pas plus à grief à la personne *observée* que le chirurgien ne la mésestimerait d'être affectée d'un trouble assez fréquent de la circulation <sup>(21)</sup>;

[...] Combien ces vices spéciaux [qui] sont la flore psychologique spéciale à cette région spéciale de la vie et du monde qu'on appelle *le monde*, sont intéressants pour un psychologue, et la fleur la plus vénéneuse, mais aussi la plus répandue dans cette terre pourrie, le snobisme <sup>(22)</sup>!

二つ目の引用には「心理的植物群」であるとか「スノビズムの花」であるとか、

相変わらずブルーストはクルティウスいうところの社会を植物系でとらえる傾向がうかがえるが、このようにしてブルーストは人間の本質を感じ取っているようだ。

猫に関心を寄せるブルーストは、1922年の11月18日に死んだから、結局、その関心は宙に浮いてしまったが、彼がさらに生きていたら、猫に対しても、同じ「観察」の視線を向ける契機になったかも知れない。しかし、おそらくそれは人間に向ける厳しく辛辣な視線ではなく、コレットのように穏やかで優しい共感を含んだ視線であったことだろう。

## 結

ブルーストの感性は「観察」をとおして植物にエロスを見出し、芸術作品の創作において開花するが、コレットが「凝視」の末に動物に見出すエロスもまた、肉体の拡大、変容を可能にし、彼女の生命力、創造力の源となり得る。

対象が植物であれ、動物であれ、普通では感じ取れないエロスに気づく感性に導かれるなら、それはロゴスを超える可能性をはらんでいるだろう。ロゴスという既存の、例えば、男性を中心に据えた価値観をも超越し得る可能性が、そこには見え隠れする。

感性の人であるブルーストもコレットも、ともに異性愛という当時、一般的と思われた既成の恋愛の型をやすやすと乗り越えたし、動物に、あるいは植物にさえも、恋愛感情ないしはエロスを感じ取るのは、ジェンダーもさることながら、生物の種しゅをも超えているのかも知れない。

両者は、ともにエロスという共通項と皮膚感覚をとおして、既存のロゴスを超越し、新たなジェンダーのとらえ方を暗示しているようである。

## 注

- (1) E.R.クウルツィウス著、大野俊一訳『現代ヨーロッパにおけるフランス精神』みすず書房、1980年、p.84
- (2) 同書、p.84
- (3) Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 4 volumes, 1984-1989, t.I, p.139
- (4) Proust, *op.cit.*, t.III, p.30
- (5) Cf. Gabrielle Sidonie Colette, *Claudine en ménage*, Pl, t.I, pp.427-428
- (6) Cf. [http://www.jeangustavetronche.fr/html/pdf/SCH\\_02.pdf](http://www.jeangustavetronche.fr/html/pdf/SCH_02.pdf)
- (7) 1999年11月24日、パリ、鑑定家チエリ・ボダンによるドルオ競売カタログ、230番、106ページ(吉川一義氏訳による)[日付けは、1922年8月1日以降、1922年8月23日以前(セレストへの言及があるので、トロンシュからの手紙以前のはず)]
- (8) *Correspondance de Marcel Proust*, t.XXI, de Gustave Tronche à Marcel Proust, le 23 août 1922, Plon, pp.431-432
- (9) Maurice Boissard, « Chronique dramatique », la *Nouvelle Revue Française*, n°107 (1<sup>er</sup> août 1922), p.216
- (10) Gabrielle Sidonie Colette, *Dialogues de bêtes*, folio plus, Gallimard, 2004, pp.29-30
- (11) Boissard, *op.cit.*, p.217
- (12) Colette, *op.cit.*, p.42
- (13) Boissard, *op.cit.*, pp.217-218
- (14) Colette, *op.cit.*, p.15
- (15) Boissard, *op.cit.*, p.219
- (16) Colette, *op.cit.*, p.28
- (17) Gabrielle Sidonie Colette, *La Paix chez les bêtes*, Fayard, 1958, p.125
- (18) Boissard, *op.cit.*, p.217
- (19) Julia Kristeva, *Le génie féminin*, t.III, Fayard, 2002, p.279
- (20) Julia Kristeva, *Le génie féminin*, t.III, Fayard, 2002, p.280
- (21) Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 4 volumes, 1984-1989, t.IV p.480
- (22) Jean Santeuil, « Bibliothèque de la Pléiade », 1987, p.428

**BIBLIOGRAPHIE**

*Euvres*, en 4 volumes, sous la direction de Claude Pichois, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la

- Pléiade », 1984, 1986, 1991, 2001
- Œuvres complètes*, en 15 volumes : Flammarion, édition dite « du Fleuron », 1948–1950
- Dialogues de bêtes*, folioplus, Gallimard, 2004
- La Paix chez les bêtes*, Fayard, 1958
- La Chatte*, Hachette Littératures, 2004
- A la recherche du temps perdu*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 4 volumes, 1984-1989
- Correspondance de Marcel Proust*, texte établi, présenté et annoté par Philip Kolb, 21 volumes, Plon, 1970-1993, t.I–XXI
- Julia Kristeva, *Le génie féminin*, t.III, Fayard, 2002, p.279
- Colette, *Chats de Colette*, éd. Albin Michel, (coll. Scènes de la vie des bêtes), 1950
- François Bruttin-de-Preux, "Des animaux dans l'œuvre de Colette", in *Etudes de lettres*, oct-déc 1962
- Michel Mouligneau, « Proust et Colette », *Bulletin Marcel Proust*, n°23, 1973, pp.1683–1685
- Maurice Boissard, « Chronique dramatique », *Nouvelle Revue Française*, n°107 (1<sup>er</sup> août 1922), pp.215-221
- 『コレット著作集 8』「動物の対話」「動物の平和」、二見書房、1971
- 『牝猫』、新潮社版、1956
- 全集『失われた時を求めて』12巻、集英社、2006
- 『ブルースト全集 16 書簡』、筑摩書房、1989
- 『評伝ブルースト上・下』、筑摩書房、2001
- 『ブルースト博物館』、筑摩書房、2002
- ハーバート・ロットマン『コレット』、工藤庸子訳、中央公論社、1992
- 工藤庸子『ブルーストからコレットへ』中公新書、1991
- 小野ゆり子『娘と女の間』中央大学出版部、1998
- 堀江珠喜『猫の比較文学』、ミネルヴァ書房、1996
- E. R. クアルツィウス『現代ヨーロッパにおけるフランス精神』大野俊一訳、みすず書房、1980
- [http://www.jeangustavetronche.fr/html/pdf/SCH\\_02.pdf](http://www.jeangustavetronche.fr/html/pdf/SCH_02.pdf)

(京都造形芸術大学准教授)